

## 21世紀COEプログラム「こころを解明する感性科学の推進」

榎正幸

基礎医学系教授

### 採択まで

平成15年は、COEに始まりCOEに暮れた一年であった。年明け早々に、原田昭專攻長から、COEのリーダーになって欲しいと要請を受け、不安を感じつつも何とかお役に立てればと引き受けたのが始まりだった。先ずは、1ヶ月後(2月6日)の学内ヒアリングに向けて急ピッチで準備を行った。感性科学をテーマとし、感性認知脳科学専攻を中核に申請することは既に決定していたが、事業推進担当者を誰にするのか、評価対象者10名を誰にするのか、どのような構成で何を主眼にした研究を進めるのかなどの具体的な内容については決まっておらず、連日コアメンバーが集合して知恵を絞った。今まで分子や遺伝子のレベルで神経科学の研究を行ってきた私にとって、感性科学は遙か遠い世界に感じられ、どこに接点を求めて統合した研究とするのか理解に苦しむことが多かった。感性とは何か、感性をど

のように研究するのか、感性の研究が何に結びつくのかなど、ごく基本的なことを何時間にも渡って繰り返し議論した。漸く全体の構想が完成し、ヒアリング資料と発表用の絵が出来上がったのが、ヒアリング当日の朝であった。ヒアリング会場で前の発表者が話している間に頭の中でリハーサルを行った。発表に使った図は、さすがにデザインの専門家の作品らしく、美しく切れの良いものだった。学長を初めとする審査員から沢山の厳しいコメントを頂いたが、学内ヒアリングは無事に通過した。次いで、30ページにもなる拠点形成計画調書を作成し、3月初めに日本学術振興会へ提出して、第一次書面審査の結果を待つこととなった。

5月初めにヒアリング審査日程の通知があり、幸運にも、我々の申請が本選に進むことができる事が伝えられた。ヒアリング審査(6月4日)まで、あと1ヶ月。ゴールデンウィークを横目に、連日コアメンバーで

知恵を絞り、発表用の資料と絵を準備した。本番1週間前の学内リハーサルで審査員から再び沢山の注文を頂き、これらのコメントを入れて修正し、最終版が完成したのは、またもや発表当日だった。綺麗に印刷製本された資料とコンピューターを持参して足早に審査会場へ向かった。会場となるホテルでは、明らかに審査を受けに集まったと思われる面々が、或人は饒舌にしゃべり、また別の人には真剣な面もちで黙り込んで順番を待っていた。これ程の緊張感を感じたのは大学入試以来かなと思った。我々のプレゼンテーションは無事に終わったが、それに引き続いて行われた審査員の質問には往生した。我々が申請した学際・複合・新領域では、審査員として様々な学問分野の代表や企業の研究所の所長など約30名が一堂に会しており、質問内容の幅は並大抵のものではなかった。哲学、宗教学、工学から医学まで、殆ど禪問答かと思われる様な難解な質疑応答の内に、30分間の持ち時間が尽きた。今から思えば、我々が申請した「こころを解明する感性科学の推進」は、人間の精神活動全てを包含する広がりを持っていた為、多くの分野の審査員に興味を持ってもらえたのかもしれない。約1ヶ月後、周囲の大方の予想を裏切り、我々の申請が採択された。

## COE拠点の目指すもの

本拠点は、平成13年度に発足した人間総合科学研究科の中に新設された感性認知脳科学専攻を中核に、心理学専攻と芸術学専攻を加え、事業推進担当者26名で構成されています。実際の活動には、更に多くの研究者に参加して頂いており、本年度は本学教官50名、大学院学生他92名の総勢約140名で研究を始めております。感性認知脳科学専攻は、医学、心理学、芸術学、心身障害学の4分野の教官が集まって新たに作られた専攻であり、大学院博士課程の研究科案内パンフレットには、「人間の感性や心と脳を結ぶ優れた基礎研究を目指します。(中略) 現在、人間の精神活動(心)と脳科学を架橋する基礎研究が求められており、人間に関するクロスディシプリナリーな視点を持った優れた学際研究を実行できる研究者及びこの領域の研究に寄与できる優れた高度専門職業人を養成します。」と紹介されています。この内容は、そのまま本拠点の目的を端的に表しており、言い換えれば、本COEは感性認知脳科学専攻の目標実現へ向けての実質的な推進力になるものと言っても良いかもしれません。本拠点研究の中核は、筑波大学芸術学系から世界へ発信されてきた感性科学を発展させるものであり、新専攻への足がかりとなった2つの筑波大学特別プロジェクト(「感性評価構

造モデル構築特別プロジェクト(平成9～13年)」と「動的脳機能とこころのアメニティ特別プロジェクト(平成10～14年)」の研究の流れを継承している事を思えば、筑波大学で培われてきた良さ伝統が結実したものと言うこともできます。

本拠点は、医学、心理学、芸術学、心身障害学を架橋・融合した感性科学を創設し、広範な研究分野を横断的に融合させることにより、これまで直感的に捉えられてきた「感性」の働きを生み出す脳機能の総合的な理解を目指しています。近年、神経科学の進歩は目覚ましく、特にここ数年は脳の活動を可視化する技術が注目を浴びています。本拠点でも、高次の脳機能が脳のどこでどのように生み出されるのかを探っていると考えています。また、ヒトゲノム解読プロジェクト終了のニュースに象徴される様に、遺伝子研究も日進月歩で進んでおり、脳機能に重要な遺伝子や遺伝性精神神経疾患の原因遺伝子が次々に報告されています。本COEでは、この様な最新の脳科学の奔流の中で、分子・遺伝子から行動、感性機能までを共通の言葉で語れる研究の場を作りたいと考えています。その為には、異分野の研究者がお互いを理解し、共通の言葉で研究を語るができる環境をつくる事が重要になってきます。そこで、本COEでは、月2回の定期ワークショップを

開催し、全ての事業推進担当者にご自分の研究内容を紹介してもらっています。この取り組みは、異なる研究分野の考え方や研究手法に触れることによって相互の理解を深めることのみならず、本拠点で目指している融合研究の萌芽を見いだす上で重要であると考えています。未だ研究がスタートして3ヶ月しか経過していませんが、着実にお互いの理解が深まりつつあると感じています。

しかしながら、現実的な問題として、これ程までに異質な分野を統合して研究して行くことに些かの不安が無い訳ではありません。また、実際に研究を始めてみると、事業推進担当者が3つの事務区(人間総合教育研究支援室)に分散していることから、事務的な取りまとめも大変であり、事務を担当される方には、緊密な連携のもとに拠点研究の推進にご協力頂いています。正に、このCOEが、研究のみならず大学の運営の上においても、人間総合科学研究科を1つにまとめる原動力となるのではないかと考えています。そして、今年の春には総合研究棟D棟が完成し、感性認知脳科学専攻の教官が1つの建物に結集して研究する環境が実現します。この好機を活かして、COEの活動と感性認知脳科学専攻の教育研究を更に発展させたいと考えています。荒唐無稽な専攻、荒唐無稽なCOEといった

悪口を言われない様に、少しでも実質的な成果を挙げて行ければと思います。

## 今後

21世紀COEプログラムは、社会的な関心が高く、厳しい評価の対象となっています。本拠点は、学際的な視点から総合的に人間の精神活動と脳機能を研究できる若手研究者の育成と、感性科学研究の成果を社会に還元できる応用的側面を担う人材の育成を目指しています。この成果は、感性反応を捉え、人の感性が受け入れ、人が満足する製品を開発するという人間志向型産業の創製にも繋がる可能性を秘めています。また、昨今問題となっている「こころ」の諸問題を解決する糸口を見いだすことも期待できると思われます。この様な提案に興味を持って頂いている民間企業からの問い合わせも多く、平成15年12月12日付けの日経産業新聞の記事によると、「企業が期待感や強い関心をもっている研究テーマ」の6位に本拠点がランクされており、注目度の高さが伺われます。今後、社会からの評価に耐える成果を如何にして出していくかが問われる厳しい状況の中で、事業推進担当者のみならず全学的な協力をお願いしたいと考えています。特に、学外ヒアリング審査で学長が提言された「COE 拠点への学内支援施策」の内、教育研究基盤校費・間接

経費の重点配分、研究専従教員の特別配置、施設・スペースの優先利用、管理業務の軽減などの施策を是非実行に移して頂きたいと希望致します。

(ます まさゆき／分子神経生物学)